
願いごと

倉花 明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願いごと

【Nコード】

N2189BA

【作者名】

倉花 明

【あらすじ】

破壊、それしか知らない一人の少年と、異常を弄ぶ少女の物語。

少年は破壊のために少女を壊した。少女は異常ゆえに少年を壊したく。

終わることのない破滅の物語。

始まりさえ壊れてしまった物語。

一章『出会い、始まる』（前書き）

諸事情により、プロローグは別に投稿してあります（ミスっただけ）

そっちから見ていただけるとありがたいです

一章『出会い、始まる』

一章『出会い、始まる』

僕は、通常の高校生の数割程の機能しか持たない運動神経を酷使していた。

「今日こそは……、絶対に手に入れてやる」

そう呟いて、僕はラストスパートを駆け抜けた。駆け抜けると言っても、

はたから見たら、マラソン大会の中盤くらいのスピードなんだろう。

僕は、自分の運動神経の怠けぶりに、そろそろ愛想を尽かしそうだ。

「着いた、はあ、うえ、……」

激しい疲労に襲われるが、気にしない。達成感が上回っている。

人はいない。いるのは購買のおばちゃんだけ。勝った。そして買

える！僕は、反抗期に入った表情筋を無理矢理動かし、満面の笑顔を作る。

僕はゆっくり、余裕をもって乱れる呼吸を鎮めた。

「おばちゃん、こんにちわ」

「おや、随分早いじゃないか」

「授業を途中で抜けたんですよ、特製カレーパンを今日こそはゲットするために」

そう、僕はこの学校で、最も美味しいと言われる特製カレーパンを買ったために、授業を途中で抜け出して全力ダッシュをしていたのだ。

この特製カレーパンは、あまりにも人気がありすぎて、授業終了後五分で完売すると言う。個数は百個ある。どう考えても五分で完売させるのは不可能なはずだが、実際に起きているから信じるしかない。

ただ、この学校の生徒は皆真面目だ。授業を途中で抜けるような不真面目な生徒は存在しない。ただ一人、僕除いて。

別に、僕が異常ってわけじゃない。みんな僕に負けず劣らず異常だ。

「悪いねえ、あれは販売が中止になったんだよ。先週の金曜日にそう聞かなかったのかい？」

このババア何を言っているんだ？ふざけるなよ、販売中止？全くもって面白くない冗談だな。

「いやだなあ、さつさと売れよ」

「だから、ないっていつてるだろう。聞き分けがないねえ。諦めて他のパン買いな」

どうやら本当らしい。だとすれば、僕のこの堪え難い疲労感はどうすればいいというんだ？報われないじゃないか。

僕は珍しく怒った。誰だ？誰が販売中止に追い込んだんだ？そういや、このババアさつき、金曜日に聞かなかったのか？って言うてやがったな。金曜日に何かあったのか？ちつ、丁度僕が休んでいた日じゃないか。誰か仕組みやがったか？

クソツタレがっ！ふんっ、まあいい、所詮はパンだ。そこまで執着する必要はない。一旦落ち着いて気持ちをリセットしよう。

「さよなら、おばちゃん」

返事がなかったが、気にしない。返事なんて期待していないからだ。足元に広がる、赤い水たまりも気にしない。ましてや、中年女性性の屍など……

僕は気晴らしに屋上へと向かった。体が疲労感に蝕まれ、鉛のように重い。必然的に気分も重くなる。

だるい。その一言に尽きる。

「はあ、特製カレーパン食べたかったなあ。まあ、ないものはしょうがないか」

僕は屋上へ出た。何とも言えない解放感があった。穏やかな風が僕の体を包み込む。幸せと言うものは、こういう時に感じるんだな。屋上で自殺する人間の気持ちが少しわかった気がする。

僕の優しい風に対する感慨は開始から十秒ももたなかった。

人がいた。屋上は立ち入り禁止だ。なのに生徒がいる。不真面目なのは僕だけのはずだ。ここに人がいるなんてあり得ない。

僕は尋ねる事にした。

「君が、持っているパンは特製カレーパンじゃないか？食べさしても構わない。良ければ僕に譲ってくれないか？」

「いいよ、あげるからこっちにきて」

その子は言った。その女の子は言った。その可愛い女の子はそう言った。

「ありがとう。君、可愛いね」

僕は彼女からパンを受け取る間際のそう呟いた。その際、しっかりと手を触った。人間関係を築くうえで、接触と言う行為は非常に大きな意味を持つ。

「そんな事ないよ……」

恥ずかしそうにして、頬を赤らめ、俯く彼女を好きにならないでいられるだろうか？

不可能だ。

早速、本能に従って口説く事にした。

「あはは、謙遜する必要はないよ。寧ろしちやダメだ。君みたいな可愛い子が謙遜したら、君以外の可愛くない子の立つ瀬がないでしょ？もっと自分に自身を持って。そうすればもっと可愛くなるはずだから」

完璧。どんな女の子でもこれでイチコロ。

「あ、ありがとう。嬉しい」

ハニカミながら微笑む彼女に一生分のときめきを消費してしまっただ。来世の分を前借りしとくか。

「君、名前は？」

「え、あつ、えーと、日暮です。日暮瑞希です」

「瑞希さんか。可愛い名前だね。好きになっちゃいそうだよ」

ちよっと距離を縮めるのが早過ぎたかな？まあ、問題ないでしょ

う。

僕はパンを飲み込んだ。そして、彼女を見た。

その瞬間、余裕。そう思った。

「好きになっちゃうの？私のこと？本当？」

「違う」

言った瞬間、彼女は顔を燃やした。いや、燃えているのか？と思っ
てしまうほど赤くなった。

「ごめんなさい。か、勘違いしちゃって……」

「ホントに勘違いも甚だしいよ。僕はもう、君のことを好きになっ
ている」

どうやら、彼女は顔を赤くするのが好きみたいだ。これから、僕
のラッキーカラーは赤にしよう。

「あ、あわわ、そ、そんな……。嬉しい」

落とした。というか、始めから落ちていた気がする。どっちにし
る、こんな可愛い子を取れば文句はない。

とどめの一言。

「良かったら、僕と付き合ってください？」

「わ、私なんかで良かったら。お願いします」

僕は今日、可愛い女の子を自分のものにした。こんなに可愛い女
の子を好き放題に……、

むふふ。

「ありがとう、よろしくね瑞希さん」

「はいっ！あの、あなたの名前……、教えて欲しいな」

「ああ、僕の名前？僕の名前は……」

強く大きな風が吹いた。さっきまでとは違って、乱暴な風だった。
自殺志願者がこれで思いとどまるのか。

「だよ」

「いい名前だね」

一章『出会い、始まる』（後書き）

誤字、脱字があれば指摘してください
お願いします

二章『異常者、崩壊』

二章『異常者、崩壊』

気分はバベルの塔。今にも天に登って行きそうだ。それも悪くはないが、足が地についてる方が幸せだ。

教師にこっぴどく怒られたが、うわの空。さらに怒られ、めんどくさい。だから逃亡し、屋上に逃げた。制服に赤いシミが出来たが、まあ気にしない。どうせもう赤いシミだらけなわけだし。

さてさて、屋上に着いたわけだけど、誰もいない。

「あれ？瑞希さんどこ？おかしいーな、もう来ているはずなのに」
急に目の前が暗くなった。

えっ？僕の現実これで終わり？

「だーれだ」

生温かい感触がする。人の肉だと言うことを察知するのに、大きく時間は取らなかった。声から判別するに、僕の愛しい彼女の瑞希さんだろう。だからと言って、そう決めつけるのは危険だ。声帯模写ができる奴なんて腐る程いる。

とりあえず殺すことにしよう。これが一番安全な方法だ。

血が吹き出る。ああ瑞希さんの血だ。なんだ、瑞希さんであっていたんじゃないか。悪いことをしたな。とは思わない。

「瑞希さんだね」

「正解だよ。でも、一々殺さなくても良いと思うな」

瑞希さんは今日も調子が良いみたいだ。
可愛いな。

「瑞希さんだから大丈夫でしょ？あ、服綺麗にしてくれてありがとう」

「私以外の人を殺したでしょ？どうしてかな？私たち付き合ってるんだよ。どうしてそんなことするのか？浮気と一緒にだよ。もう、私は飽きたの？嫌いになったの？私何か悪いことした？それなら謝

るから。お願い、私を見捨てないで。私はあなたのことずっと愛し続けるから。嫌いにならないで」

瑞希さんはヤンデレだ。付き合った初日にすぐ気付いた。恐ろしいほどの言及行為。ヤンデレと言うのは、相手のことが好き過ぎるあまり、相手のことを考えずに、自分の愛情を表現することになる自己満足の塊だ。

「ごめんね、瑞希さん。でも、誰かを殺すのは、僕の勝手だよな？ 瑞希さんがどうこう言うことじゃないよね？」

瑞希さんは泣いた。しゃがみ込み、俯いて、顔を手で覆うようにして泣いた。

煩わしい。

僕は瑞希さんを殺した。肉が飛び散り、骨が砕け、血が舞い踊る。目が転がり落ち、腕が？げ、足が彷徨う。頭が潰れ、内臓が抉れ、神経が絡まる。僕は、脳がむき出しになっている頭骨を踏み潰した。瑞希さんを殺すのはこれで何度目になるんだろう？ 相当な数殺したと思うけど……。

「私のこと好き？」

「うん」

どうしてだろう？ 瑞希さんを殺しても、何度殺しても、満たされない。

瑞希さんに会ってから僕はおかしくなった。人を殺す回数が異常なほどに増えた。みんな死ぬ。殺せば死ぬ。死ぬはずなのに……

死なない人に出会った。何度殺しても死なない。僕が殺せない。僕が壊せない。そんな存在はおかしい。僕は無力なんかじゃない。ちゃんと殺せる。ちゃんと壊せる。

日暮瑞希。たった一人の例外を除いて。

日暮瑞希はこの世界においても異常だ。異常が普通のこの世界においても異常だ。

僕は、この異常を壊したくて仕方がない。この異常が壊れる瞬間を見てみたい。

「嬉しいな。あなたが私のことを、好きって言うてくれる。それだけで満たされる。あなたのためなら何でもできると思う。ううん、何でもする。あなたが好き。あなたの全てが私の世界。愛してる。違うの、こんな言葉じゃ伝えきれない。でも、わかってくれるよね？私、あなたに嫌われたらどうなっちゃうんだろう。あ、ごめんなさい。あなたが私のことを嫌いになるなんてないもんね。気分を悪くした？ごめんね、でもそれだけあなたのことを思ってるの」

こんなことを満面の笑みで言われたら、壊したくなるじゃないか。ムラムラしてきた。早く壊したい。抑えられない生衝動。いや、逆だね。僕の生衝動の発散で、生きられる者なんていないんだから。

そうか！そういうことか！あはは、なんだ簡単じゃんか。日暮瑞希を壊すなんて。どうして今まで気づかなかっただらう？笑っちゃうよ。

「瑞希さん」

「なあに？」

「嫌い。大嫌い」

世界が一瞬にして消えた。

三章 『破壊者、墜ちる』

三章 『破壊者、墜ちる』

「ちっ、異常にもほどがあんだろ」

僕は闇に包まれた町を見渡した。何も無い。光すら無い。異常すぎだ。想像以上。

「みいつけた」

僕は、全身に奔る激痛を無視して、走った。こんなに痛いのに死なないってのが驚きだ。まあいいさ。こっちだって策がないわけじゃないんだ。殺る。殺ってやる。僕は伊達に破壊者って異名をつけられているわけじゃないんだ。なにがなんでも壊してやる。異常者は異常者らしく異常の中で異常しとけ！世界を間違える暇があったら死ね。

僕は背中にかかる血を意識しつつ、太腿に刺さった骨を抜いた。首下にこべりついた肉を拭いた。あ、ついやってしまった。僕は無駄な動作を少し悔やんだ。気付けば、血も、肉も、骨も全て消えていた。いや、全て元通りになって僕の前に立っていた。

「どうして逃げるのかな？」

「瑞希さん怒ってるでしょ？」

答えは、僕の腕を瑞希さんが持っていることでわかった。いつのまにか片腕がなくなっている。もう、痛みなんて感じない。感じる暇がない。僕は自分の腕ごと、彼女を壊した。

肉片が飛び散った。僕の足元に転がってきた目玉が僕を睨むように見つめる。僕はそれを踏み潰そうとしたができなかった。足がない。足が消えている。ふざけやがって。

「僕の足、返してくれない？このままじゃ今年の運動会でリレーに出れないでしょ？」

「あなたの体は私のものよ。私がどうしようもないじゃない」
瞬きする間もなかった。僕の頬に瑞希さんの吐息がかかる。

は破壊者だ。

「違うよ。あなたは普通。ただの普通」

「ふざけるなああああああ!!!」

僕が普通？そんなはずない。破壊者僕が普通なはずない。

僕は壊した。壊れないおもちゃを壊した。倒れない人形を何度でも倒そうとする子供のように。千切れない人形を何度でも千切ろうとする子供のように。何度も血を呑んだ。何度も肉を喰った。何度も骨を吸った。何度も心を壊した。まだ壊れないのか？いつになったら消えるんだ？どうしたら僕の前から消えるんだ？

「消えないよ。あなたの為にまだ終わらない。終わらない。終わらせないよ」

僕の為？何が僕の為になるの？僕はなんにも願ってないよ。

「願ったよ。何度も何度も私に願ったよ。また、願ってみる？」

願うよ。願ってやるさ。消える。いつもの前から消え失せる！

消滅しろ。

「いや。もう、ダメ。それはダメ。意味ない。何度も同じことを繰り返すだけだから」

願いを叶えてくれない流れ星にようなんてない。勝手に流れればいい。涙を流したところで、変わらない。流れないなら壊すだけだ。

さあ、壊れるよ。

「ダメだよ。ごめんね、私が遅すぎたから。あなたは壊れたのね。自分まで壊してしまったのね。本当にごめんね。もっと、もっと早かったら。もっと早く私がああなたの星になれたら、こんなことにはならなかったのに」

自分を壊した？何を言ってるの？僕は壊れてなんかいない。僕は壊れてない。僕は壊すだけだ。壊れるなんてありえない。もういいさ。破壊者である僕をここまで虚仮にしたんだ。壊れるまで終わらさない。なにが何でも壊す。壊れるまで壊す。壊して壊す。

僕は目の前の肉の塊を圧縮した。彼女は無表情のままどんどん潰れていく。骨が折れる音がする。バキバキ、グキヤグキヤと。肉が

決れる音が聞こえる。グチャグチャ、ブチブチと。血が吹き出る音が響く。ドピュドピュ、又チヨ又チヨと。それでも彼女は小さくなっていく。無表情のまま。そして、消えた。

背後を取られた。腹に手が回る。相手の腹が背にあたる。僕はとりあえず、駆逐した。生暖かい液体が僕の体を覆う。そんなものを目をくれず、横にいる瑞希さんを干切った。そのままの勢いで、前方にいる日暮瑞希を押しつぶした。僕は休まずに上にいる女性を刺し殺した。そこで気を抜かず、僕は、僕を抱きしめる女の子を抱きしめた。

そして潰した。僕の体に、瑞希さんの骨が刺さる。瑞希さんの血が僕の中に入る。瑞希さんの肉に埋もれてしまう。

僕は死んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2189ba/>

願いごと

2012年1月6日18時55分発行